小森先生

Junko Higasa

私は新聞を後ろの頁から読む。2008 年のある日、新聞を開くと、リニューアルされた漱石公園の猫の墓の写真が目に飛び込んで来た。同時に「私はこの猫に会いに行かなければならない」と強く思い、休日に訪ねることにした。その帰り道のことである。通りの角に「NPO 法人漱石山房」の事務所を発見した。中へ入ってみると、いくらかの展示があって、受付のところに講演会のチラシがある。講演者：小森陽一：東大教授とある。「東大の先生の話は滅多に聴けないな」と思って聞くと、チケットはまだあるというのでフワリと買ってみた。ところが私は漱石作品をほとんど読んでいない。「東大の先生の話じゃ、聴いて解らなかったらまずい」とハタと気付き、「講演会までにまだ時間がある」と、その足で書店に寄って漱石の文庫本を買い込んだ。そしてその日から一気呵成に読み出して、何とか講演会までに間に合わせることが出来た。

さて、講演会に行くと話が面白い。その後も「NPO 法人漱石山房」主催講演会で何度か話を聴き、小森先生の講座に興味を持った。何しろ私の脳には相性と云うものがある。子供の頃から頭に入る話と入らない話があって、音楽と同じでテンポが物を言う。そこでふと「小森先生の話なら頭に入りそうだから、漱石を学べるかもしれない」と思ったが、講座は平日の昼間である。その時間を確保できたのは数年後だった。

そのとき『吾輩は猫である』の第 4 章まではすでに終了していて、第 5 章から聴いたのだが、世間ではちょうど原子力問題が起きていた。それが漱石作品と絡む。その時点で、先生の政治的活動も知っていた私は「政治的には流されまい」という気持ちが湧いたが、漱石作品にある政治性は受け止めた。そして感覚的に「明治時代」に瞬間移動したと同時に、自分の頭の歯車が今までにない速度で回転するのを感じた。

次は『草枕』である。その社会背景に驚くと同時に、この作品の藝術性を改めて受け止めた。最後の思いっきり政治的パンチはきつかったけれど。

それから『虞美人草』であるが、東京と京都の二都物語を中心に、シェイクスピア作品についても触れて、大変面白い講義だった。同時に、歴史も英語も苦手な私は、かなり勉強の必要が出来た。日本の歴史を調べまくる。本屋にないシェイクスピアの作品はイギリスからダウンロードする。『猫』の時も調べ物をしたが、その比ではない。仕事から帰ってからの時間だけでは足りず、頭の回転が止まらず連日午前二時まで。こんなに集中して勉強したのは生まれて初めてだった。そしてこの講義の最中に時々頭に浮かんだ光景がある。坂の上の雲ならぬ「坂の上の空」である。そのとき私は、先生が坂の下からあの空を目指しているような気がした。先生が『虞美人草』を好きではなかったと後から知ったが、その表れだったのかもしれない。

そして『虞美人草』が終わって、私は自ら『三四郎』を読み始めた。すると不思議なことにポイントが自然と見えてくる。私はその時気付いた。『虞美人草』をやっている間に、そのポイントの見つけ方を習得したのだと。知識を与えてくれる先生は多い。しかし自分の脳を働かせるように鍛えてくれる先生には、なかなかお目にかかれない。そういう意味で私は、自分の脳を働かせる楽しさと、勉強の楽しさを教えて下さった小森先生と、「NPO 法人漱石山房」のレヴェルに感謝している。　(2014.7.7)